

# 全国学力調査問題の検討 1

## 2018年小学・国語A 2の検討

加藤郁夫

### はじめに ー全国学力調査問題を検討する意味

全国学力調査は2007年から始まったが、問題自体の検討はあまり行われていないように思われる。毎年、秋にその結果が発表され、都道府県別の順位が示される。ところによっては、学校の成績を公表するような動きもある。そのような結果の公表が、現場への圧力となっていることは確かであろう。昨年末、福井県では池田町で起きた中学生の自死事件を受けて「福井県の教育行政の根本的見直しを求める意見書」が県議会で可決された。そこには以下のような文言がある。

池田中学校の事件について、学校の対応が問題とされた背景には、学力を求めるあまりの業務多忙もしくは教育目的を取り違えることにより、教員が子どもたちに適切に対応する精神的なゆとりを失っている状況があったのではないかと懸念するものである。

このような状況は池田町だけにとどまらず、「学力日本一」を維持することが本県全域において教育現場に無言のプレッシャーを与え、教員、生徒双方のストレスの要因となっていると考える。

学力調査が、現場のプレッシャーになっていることを県議会が認めたのである。

この文章では、その学力調査の問題そのものを検討していこうと考える。「学力調査」といいながら、問題そのものが「調査」にふさわしいものになりえているのかどうか、疑問があるからである。

歪んだものさしで測ったところで、正確な数値は求められない。学力調査自体が、歪んだものであるならば、その結果に振り回されている現場は悲惨である。

改めて全国学力調査の目的を確認しておこう。文科省HPには調査の目的が次のように述べられている。

- ・義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- ・そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。
- ・学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。

### 「はじめ—中—終わり」は物語の構成概念か？

物語の構成を「はじめ—中—終わり」として説明している。確かに今までも、物語の構成を「はじめ—中—終わり」でとらえようとする考え方は一部に存在した。しかし、あまり多くはなかったため、特に問題として指摘することはなかった。

\*光村図書小学2年の「スイミー」の学習の手引きが「はじめ—中—おわり」で「スイミー」の話をまとめる表を出しており、それを批判したことはある。読み研HP (<http://www.yomiken.jp/>) の「コラム」『27年度版教科書つれづれ 12 「スイミー」(光村図書・小学2年)の巻』(2015年06月11日アップ) 参照

今回これを取り上げたのは、全国学力調査の影響力の大きさからである。学習指導要領においても「は

「はじめ—中—終わり」を「文学的な文章」の構成としては説明していない。現行の学習指導要領の解説では、「書くこと」に関わり次のように述べている。

書きたいことは、書く前から明確である場合もあるが、書くことによって明確になる場合もある。低学年では、構成を考えることによって自分の考えを明確にしていくことを重視する。「事柄の順序に沿って簡単な構成を考えること」とは、取材した事柄の順序に沿いながら、文章の始めから終わりまでを、内容のまとまりごとに、いくつかに分けて配置していくことを意識することである。その際、文章には「はじめ—中—終わり」などの構成があることを意識できるようにすることが大切である。

今回の問題で、物語の構成として「はじめ—中—終わり」を取り上げたことで、全国学力調査の結果に汲々としている現場の先生方は、物語の構成は「はじめ—中—終わり」でとらえる方がよいのだ、あるいはそう教えておく方が、テストの成績を上げるためにはよいのだといった考え方になってしまう先生が出てこないだろうか、そんな不安を抱かせる問題である。

読み研では、説明的文章の読みにおいて「はじめ—中—終わり」を用いるが、物語においては用いていない。その一番大きな理由は、文章のジャンルが異なっていることによる。説明的文章は、読者にあることから（筆者の考えという場合もある）についてわかりやすく説明するものである。そこでは、何について述べるかをはじめに読者に示すことで、読者の理解を助けていく。説明的文章では、「はじめ」に読者にある方向性を示すのである。読者もそれを受け止めて、文章がどのような方向に向かっていくのかをおおよそ理解した上で、読みを進めていく。

たとえば、今回の小学校B問題②の「かみかみあえ」を紹介する文章に関わる問題の問一では、文章の最初の部分の役割が問われている。説明文の「はじめ」のはたす役割の意味が問われているのである。

それに対して物語では、通常そのような方向性は示されない。読み始めた時に、物語の終わりが予想できてしまうのでは、物語を読む楽しみは半減する。どうなっていくのか、どこに進むのか、その期待感が読者に物語を読み進めさせるのである。

説明的文章と物語では、その意図する方向性が180度異なっている。それを「はじめ—中—終わり」という同じ構成概念でとらえようとするとところに無理がある。

物語の一番のポイントは変化（クライマックス）にある。物語では、何か事件が語られる。その事件の最大の転換点がクライマックスである。「はじめ—中—終わり」は、物語の事件に焦点を当てた考え方ではもともとない。事実、この問題においては「はじめ」のところは次のように書かれている。「ケンとアンは、村に伝わる宝物の話をおじいさんから聞き、宝探しに出かける。」「はじめ」において、宝探しはすでに始まっているのである。したがって、クライマックスが含まれる場面（読み研では「山場の部」と呼ぶが）が「中」に含まれるのか「終わり」に入るのかも曖昧である。

今回の問題では「宝物を見つける」場面が、終わりになっている。つまりクライマックスを含む場面が「終わり」にされているが、どの物語でもそうはいかないだろう。物語を「はじめ—中—終わり」でとらえている実践の中には、終結部を「終わり」にしているものもある。つまり、「はじめ—中—終わり」で物語をとらえようとするところにおいて、「はじめ」とは何か、「終わり」とは何かといった規定が曖昧なのである。それゆえに、何となく三つには分けるものの、分けたことで何かが明らかになってくるというようにはならない。

余談ではあるが、説明的文章でも「はじめ—中—終わり」に分けるだけで終わっている実践が多く見られる。構成を読むことは、三つに分けることが目的ではない。問題提示がどこにあるのか、どこでまとめているのかなどを読み取ってこそ、構成を読んだといえるのである。

教師の主導で授業が進んでいく場合、それは大きな矛盾とはなっていないが、子どもが主体的に読みを進めていこうとする時（言い換えたら、子どもが「はじめ—中—終わり」をものさしとして物語を読んでいこうとした時）、有効なものさしとなりえないのである。

教科書で「はじめ—中—終わり」が説明されるのも説明文のところである。子どもたちは、説明的な文章に関わって「はじめ—中—終わり」という構成概念を学習しているのであり、そのような理解を持ってきた子どもたちに対して、物語が「はじめ—中—終わり」で書かれるということに違和感を抱いたとしても不思議ではない。この問題は、教科書を通して学んできたことに対する無用な混乱を子どもたちに与えかねないものである。きちんと指導要領や教科書に沿って学習してきた子どもたちがかえって不利になりかねない問題といえる。

今回の問題の場合、「はじめ—中—終わり」という構成を述べなければ、問題が成立しないかと言えばそうではない。あらすじの始めから①②③④⑤⑥と番号をふり、②～⑤にみられる工夫として適切なものを選ぶようにすれば、何の問題もなかった。わざわざ「はじめ—中—終わり」という構成を持ち出す意味は何らなかった。

2017年に出された新しい学習指導要領では教科の目標を次のように述べている。

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

「はじめ—中—終わり」というものさしを、物語でも説明的な文章でも使うという、いい加減な使い方を教えることは、「言葉による見方・考え方」について子どもたちをより混乱させることになる。子どもたちの学力を測るべきものが、逆に現場に混乱しか持ち込まないとすれば、本末転倒どころか、「学力調査」が指導要領を「裏切る」ものになっていくのではないだろうか。